

## 生解脱の定義

沈 奉燮

### <目 次>

- I はじめに
- II 広義の生解脱
- III 生解脱に対する否定
- IV 生解脱に対する消極的肯定
- V 狭義の生解脱
- VI 略号, 使用テキスト及び参考文献

### I はじめに

インドでは一般に, 人生の目的(puruṣārtha)として, 法(dharma, 宗教的社会的義務), 実利(artha), 性愛(kāma)の三項(trivarga)を数える。後には解脱(mokṣa, mukti, vimukti)を加え, 四項(caturvarga)を数えることになるが, その解脱こそがインド哲学諸派の求める究極の目標である。解脱は普段「輪廻からの解脱」(liberation from reincarnation)と理解される<sup>1</sup>。それは「輪廻」の状態に陥っている生類はそこから脱出(=解脱;解放)する事が出来る, 或いは脱出しなければならないという世界観に因る。そしてその脱出のしかたなどは諸学派の所論によって少なからず異なるので, 諸派は各々独自の「解脱論」を有することになる。そして jīvanmukti(生解脱;生前解脱;生身解脱)はその相違点の一つを成す。

---

<sup>1</sup> 解脱(mokṣa)の語は√muc からの派生語で, 解放, 脱出, 自由, 脱却などを意味するとされる。具体的には「輪廻からの解放」「諸苦からの解放」「(心の)煩悩からの解放」「永遠の生」「不死」などを意味するが, 全体として何らかの意味で「輪廻からの解放」の考えに関わっている。cf.『南アジアを知る辞典』p.225 など。

生解脱論は解脱論の一部を形成する。解脱論は、解脱の主体や解脱の手段など、解脱全般に関する包括的議論を含むが、生解脱論は、明知の出現(=輪廻からの解放;殆どの場合両者は同時に行われる)以後のみが議論の対象なので、「知者(=輪廻からの解脱を得た解脱者)に於ける身体及び分別見(bhedaśāna)の存続」と「知者の内面的及び外面的あり方」などに関するより部分的議論を中心とする。Vetter[1979]は、生解脱の問題を解脱論の諸項目の中、最後の一つとして挙げている<sup>2</sup>。

インドに生まれた諸学派の中では jīvanmukti の概念を有するものが多い。この概念は仏教<sup>3</sup>を始め、ジャイナ教<sup>4</sup>、サーンキヤ・ヨーガ派<sup>5</sup>、ニヤーヤ・ヴァイシェシカ派<sup>6</sup>、ヴェーダーンタ派などインドに生まれた諸宗派に広く認められており、インドの精神文化を知る上で一つの肝心のキーワードになりうる<sup>7</sup>。

インド文化そのものの成立は、ヴェーダ文献はもちろんのこと、幾人か

<sup>2</sup> cf. Vetter[1979] p.17-18.

<sup>3</sup> 仏教では涅槃を有余涅槃(sopādhīśeṣa nirvāṇa)と無余涅槃(anupādhīśeṣa nirvāṇa)とに分けており、特に前者が jīvanmukti の境地にあたるとされる。これらの涅槃に関する言及はパーリニカーヤの次の箇所で見当たる。cf. PTS, *Itivuttaka* p.38; *Aṅguttara-nikāya* vol.4 p.76 など。

<sup>4</sup> ジャイナ教において解脱を得た最高人格者は「修行完成者」(kevalin)と呼ばれるが、彼れは「生解脱者」とであるとされる。cf. Srivastava[1990] p.80; 仏教思想 8 『解脱』 p.4. また Prabhācandra(980-1065)の著した *Prameya Kamal Mārtand* と *Nyāya Kumud Chandra* は「修行完成者」(kevalin)が jīvanmukti の状態にあることを jīvanmukti の語を用いながら述べている。cf. Srivastava [1990] p.80.

<sup>5</sup> SK 67 など。

<sup>6</sup> *Padārthadharmasamgraha*(SS 6)p.281; *Maṇikāya*(Adyar LS 88) p.60; *Nyāyavārttika* (Munshiram Manoharlal Publisher)p.67; cf. 伊藤[1986] p.421 note 1.

<sup>7</sup> "Jīvanmukti, if we rightly understand the spirit of Indian philosophy, is indeed the highest and most truly philosophical of all conceptions of deliverance, and may be said to represent a landmark in the history of philosophic thought in India" M. Hiriyanna: *Reviews (Kaivalya)*, Mysore, 1970, p.7; cf. Ramachandra Rao[1979] p.7 に引用されている。

の宗教的覚者にも大いに頼っている。これらの覚者ないし諸宗派の創始者は、普段、生解脱者(jīvanmukta)の典型とされる。もしも彼らが解脱を得た時点で身体が崩壊したとすれば、即ち彼らが覚者または解脱者または師匠として生きていられなかったとすれば、彼らの教えも宗派も成り立たなくなる。そのせいであろう。インドの殆どの宗派は生解脱の概念を有し認めている。ところが生解脱の議論が諸宗派によって同じく重視されているわけではない。それは特に不二一元論派に重んじられ、その派を中心に展開される。本稿は生解脱の概念がインドの諸宗派に同じく認められたにもかかわらず、なにか何故不二一元論派に重んじられ議論されて来たかを検討する。そしてそれは生解脱の定義の問題にも深く関わる。

## II 広義の生解脱

生解脱を論究し、この主題を学的テーマの一つにまで格上げさせた Sprockhoff[1962]は、*Chāndogya-upa* 6.14.2; *Bṛhadāraṇyaka-upa* 4.4.6; *Kaṭha-upa* 5.1 などを典拠に、生解脱の概念の起源がウパニシャッドに始まることを証明している。論文の中で、Sprockhoff は、生解脱の概念と離身解脱の概念とがウパニシャッドにおいて同時に認められていたことと推察した。例えば、「解脱した人が解脱する」(vimuktaś ca vimucyate (*Kaṭha-upa* 5.1))とすれば、「解脱した人」は「生解脱者」であり、「解脱する」は離身解脱を意図する、とされる。要するに、生解脱は離身解脱を前提に成立した概念とされる。このように、生解脱の概念は、ウパニシャッドにおいて既に形成されていたと見ていいであろう。

ところが、概念としての生解脱(jīvanmukti)が、生解脱論(jīvanmukti-vāda)になれたのは「既に動き出した業」([pra-]ārabdha-karma, 以下「始動業」)の概念の登場による<sup>8</sup>。その概念の登場によって生解脱論は初めて緻密な議

<sup>8</sup> SK 67 における潜勢力(saṃskāra)は、知者の身体の維持の原因とされ、[pra-]ārabdha-karma に相当する。

「潜勢力によって轆轤の回転のように身体を有する人は存続する」

tiṣṭhati saṃskāraśāśac cakrabhramavad dhṛtaśarīrah (SK 67)

論の形になれたのである。そして始動業の概念を用いての生解脱論は、Śaṅkara によって為され、以後、不二一元論派の伝統説となった。彼は *BSBh* 4.1.15; *BSBh* 4.1.19; *Chāndogya-upa-Bh* 6.14.2 などにおいて、

明知の出現によって無明の一部である「未だ動き出していない業」(anārabdha-karma, 以下「未動業」)は消え去るが、他の一部である「始動業」(prārabdha-karma)は明知より強力であり、しかも明知と矛盾しないので、明知と始動業は共存することが出来る。という訳で明知が出現しても始動業によって知者の身体はすぐさま崩壊せず当分の間維持される。

という。要するに、生解脱は「始動業によって、明知を得た後の知者の身体が存続すること」である。このような定義を、筆者は「広義の生解脱」とする。

ところで、始動業を認め、しかもそれによる知者の身体の存続を認めたからと言って、直ちに生解脱を認めたと言えるのか。

明知の出現後の知者の身体の存続とそれを可能ならしめる力としての始動業の概念はニヤーヤ・ヴァイシェシカ派、サーンキヤ派などにも見られる。明知の出現によって輪廻からの解脱が保証される点、始動業によって知者の身体が当分の間維持される点などについては、始動業の概念を有する学派なら皆支持したようである。ところが、これらの諸宗派は、始動業を認め、しかも始動業による知者の身体の存続を認めたにもかかわらず、生解脱に対して、消極的ないし否定的態度を貫いている。

### III 生解脱に対する否定

Sprockhoff[1962] p.151 は、生解脱の概念には矛盾があるとし、そのことを次のように語っている。

「現存在が持続する中で現存在が除去されていることが生解脱である。...生解脱は輪廻からの解脱(mukti)であり、同時に輪廻の中に現存

すること(jīvat)である。この生解脱が実現されている人物が、従って、生解脱者(jīvanmukta)と呼ばれる。」<sup>9</sup>

「無明の産物である身体を保持しながら(jīvat)、しかも無明の除去された状態である(mukti)」とする生解脱の概念はそもそも矛盾をはらんでいる<sup>10</sup>。その分だけ、生解脱に対する反論ないし否定も少なくなかったであろう。例えば、Śaṅkara の生解脱論の場合、反論に対する答えが議論の重要部分を占める。実際、*Brahmasiddhi* (Maṇḍanamiśra, 670-720), *Samkṣepaśārīraka* (Sarvajñātman, 750-800), *Śrī-bhāṣya* (Rāmānuja, 1017-1137)などには、「始動業」を認めず、生解脱そのものが否定される見解が見られる。それらの書物の当該個所には、始動業の代わり、「即死解脱」(sadyomukti)<sup>11</sup>のみ認められている。以下当該諸個所を紹介する。

#### 1. *Brahmasiddhi* の当該個所

Maṇḍanamiśra に帰せられる *Brahmasiddhi* (*Sri Garib Das Oriental Series* No.16, p.129)には生解脱を次のように否定した個所がある。

<sup>9</sup> "Die Aufhebung des Daseins in der Fortdauer des Daseins ist die Erlösung zu Lebzeiten. ... die Erlösung bei Lebzeiten ist also ein Enthobensein --- 'mukṭih' --- aus dem Saṃsāra und ein Gleichzeitiges --- 'jīvat' --- Darin stehen in ihm. die Gestalt, an der die Erlösung bei Lebzeiten verwirklicht worden ist, heißt mithin 'jīvanmukta', 'ein bei Lebzeiten Erlöster'." cf. Sprockhoff [1962] p.151

<sup>10</sup> cf. *Sarvadarśanasamgraha* (Gos No.4 Poona 1951, p.206, 80)には次のようにある。

jīvatvaṃ nāma saṃsāritvaṃ, tad-viparītatvaṃ muktatvaṃ.

<sup>11</sup> sadyomukti の語はこのように jīvanmukti の反意語として用いられる場合があるが、kramamukti の反意語として用いられる場合もある。後者の場合の sadyomukti は漸悟(kramamukti, 漸進解脱)に対する頓悟に当てはまる。後者のような用例としては Śaṅkara の次のような言及を挙げることができる。

「アートマンに関する認識は突然に起こる解脱の原因でもある」

(sadyomuktikāraṇam apy ātmajñānam; *BSBh* vol.1 p.114 l.11; cf. 中村[1989]『シャンカラの思想』p.747)

それ故に；解脱は即座のみであり，それを待つ必要がない。しかしながら，この場合は身体の崩壊は，解脱と同時に必然的に起こるので，確かにある。

ataḥ kṣīpraiva muktiḥ, na pratikṣaṇīyam asti; dehapātas tu tatra nāntarīyakatvād bhavaty eva/(p.129)

Maṇḍanamiśra はここで即死解脱(sadyomukti)の語は用いていないものの彼の言う趣旨はそれに違いない。

## 2. Saṃkṣepaśārīraka の当該箇所

一方，Sarvajñātman(750-800)の主著 *Saṃkṣepaśārīraka* 4-38;4 - 39 には次のような生解脱を否定する箇所がある。

実体の力のような，吹いてくる風の働きによって燃え上る正知のような炎は無明とその副産物とをすべて，残さず，直ちに燃やし尽くす。彼には輪廻界の他の姿は少しも残らない。従ってその知者には即死解脱が生じるに違いない。

samyajñānavibhāvasuḥ sakalam evājñānatatsambhavam sadyo vastubala-pravartanam arudvyāpārasaṃdīpitaḥ/  
nirlepena hi dandahīti na manāg apy asya rūpāntaram saṃsārasya śinaṣṭi tena viduṣaḥ sadyo vimuktir dhruvā/(4 - 38)

生解脱を述べる諸々の経典は架空の生解脱者について述べていると理解すべきである。その限りにおいてのみ[経典が]意味を持つのであるから，それ故に，即死解脱が正しい。

jīvanmuktipratyayaṃ śāstrajātaṃ jīvanmukte kalpite yojaniyam/  
tāvaṃ mātreṇārthavattvopapatteḥ sadyo muktiḥ samyag etasya hetoḥ/(4-39)

Sarvajñātman は，即死解脱の語を用いながら，生解脱を否定しており，Maṇḍanamiśra より進展した形となっている。ところが両者は上記の彼らの

主著において一貫して即死解脱を主張しているわけではない。どちらかというところ，彼らは或る個所では即死解脱を主張しながらも，他の個所では生解脱をも認めており，二重的態度を取っている。

## 3. Śrī-bhāṣya の当該箇所

Rāmānuja(1017-1137 年)の主著 *Śrī-bhāṣya* において即死解脱を断言していないが，そういった趣旨で生解脱をきっぱりと否定している。また彼は始動業を言及したこともあるが<sup>12</sup>，そこで生解脱論を展開したりはしない。一般に彼は現代の諸学者によって「彼は生解脱を否定した」とされる(cf. Srivastava[1990] p.256-258). *Śrī-bhāṣya* (BS 1.1.4 の注釈の部分; *Śrī Rāmānuja Nine Valuable Works* p.116-)には次のように生解脱が否定されている。

また生解脱とは一体何か。もしもそれは身体を有するものの解脱であるというのなら，「私の母は石女である」というのと同様であり，意味を持たない言葉である。何となれば身体を持つとは束縛のことであり，身体を持たないことこそが解脱であると汝自らが，諸天啓聖典を根拠に，教えたからである。---<中略>--- 従って明知のみによって解脱が得られるというのも排斥された。従って一切の区別の消滅を本質とする解脱は，生きている人には成立しない。

kā ceyam jīvanmukti? saśarīrasyaiva mokṣa iti cet, mātā me vandhyetivad asaṅgatārthaṃ vacaḥ; yatas saśarīratvaṃ bandhaḥ, aśarīratvaṃ eva mokṣa iti tvayaiva śrutibhir upapāditam/ ---<中略>--- anena jñānamātrān mokṣaś ca nirastaḥ/ atas sakalabhedanivṛttirūpā muktir jīvato na sambhavati/

<sup>12</sup> cf. *Śrī-bhāṣya* 3.3.31 で次のように述べている。

何となれば既に動き出した業(始動業)は享受によってのみ消滅するからである。それ故に任務を有する人々における，そ[の任務]を作り出している業は，任務がある限り，持続する。

prārabdhasya hi karmaṇo bhogād eva kṣayaḥ/ ata ādhikārikāṇāṃ tadārambhakaṃ karma yāvad adhikāram avatiṣṭhate/

Rāmānuja が意図する解脱は、身体を維持したままの解脱でなく、身体を離れての解脱である。彼の意図する解脱は kaivalya に他ならない。一方、不二一元論派の伝統の中で、Prakāśānanda(1550-1600 年頃)も離身解脱を意図して生解脱を否定したとされる<sup>13</sup>。

#### IV 生解脱に対する消極的肯定

サーンキヤ・ヨーガ派、ニヤーヤ派、Bhāskara(750-800)などヴェーダーンタ派の一部<sup>14</sup>は、明知の出現後の知者の身体の存続とそれを可能ならしめる力としての始動業を認める。にもかかわらずこれらの諸派は生解脱に関して積極的に肯定したり、議論を展開したりはしない。むしろ、強弱の相違はあるが、生解脱の状態を否定的にとらえる。これらの諸派の態度は消極的肯定、或は消極的否定にまとめることが出来る。

##### 1. サーンキヤ・ヨーガ派

サーンキヤ派の主たる経典としての SK 67 と 68 には、生解脱と離身解脱とがそれぞれ言及されている。ここで、両解脱は順次に起こるものとされ、離身解脱の優位が暗示されている。しかも、離身解脱の方が完全且つ永遠なものとして称揚されている<sup>15</sup>。それ故に、生解脱より離身解脱が上位

<sup>13</sup> cf. *Vedānta-siddhānta-muktāvalī* (Gokuldas Sanskrit Series 4, p.137-141); Srivastava [1990] p.253-254.

<sup>14</sup> Bhāskara と不二一元論派の Brahmanandasarasvatī などこの類型に含まれるようである。cf. Oberhammer[1994] p.6-7; p.50-53; Kuppuswami Sastri[1984], introduction xl note 90.

<sup>15</sup> SK 67, 68 は次のように述べられている。

「潜勢力によって轆轤の回転のように身体を有する人は存続する」

tiṣṭhati saṃskāravaśāc cakrabhramavad dhṛtaśarīrah (SK 67)

「身体からの分離が訪れれば、即ち目的が達成されたので根本原質が消え去れば、完全且つ永遠な独存に達する」

prāpte zarīrabhede caritārthatvāt pradhānavinivṛtau/

の解脱として述べられていると見る事が出来る。

一方、SK より後代のものとされる *Sāṃkhya Sūtra* の 3.78 には

「有資格者(adhikārin)には三種類あり、初歩的資格者(mandādhikārin)と中間の資格者(madhyamādhikārin)と究極の資格者(uttamādhikārin)とである。中で中間の資格者が生解脱者である。」

(cf. Nampoothiri[1990] p.237)

とある。それに対して *Bhāṣya*(作者は Vijñānabhikṣu)は

「有相のヨーガ(samprajñātayoga)によって、puruṣa は中間の分別力(madhyamaviveka)を得、その状態において苦と楽を経験する。(そしてその状態が生解脱の状態である)」

という(cf. Nampoothiri[1990] p.237)。要するに、ここで生解脱者は「究極の資格者」ないし「無相三昧を備えた」最高の存在でなく、苦と楽を経験する、それより一段階劣る存在とされる。

一方、ヨーガ派は *Yoga Sūtra* などに於いてサーンキヤ派の生解脱論と同様のことを述べている。即ち、*Yoga Sūtra* は三昧を有相三昧(samprajñāta samādhi)と無相三昧(asamprajñāta samādhi)とに分け、後者を上位のものとする(*Yoga Sūtra* 1.17;1.51)。そしてその注釈書たる *Vyāsa Bhāṣya* は「前者が生解脱に導き、後者は最後の解脱(apavarga)に導く」としている(cf. Nampoothiri[1990] p.237)。

サーンキヤ派の SK や *Sāṃkhya Sūtra* などにしてもヨーガ派の *Yoga Sūtra* などにしても「生解脱」を「最後の解脱」(apavarga, videhamukti, kaivalya)の前の段階に置いて、後者より低いものとしている点に注目されたい。

##### 2. ニヤーヤ派

ニヤーヤ派の伝統に於いて、生解脱論をめぐることは、Uddyotakara (550-610

aikāntikam ātyantikam ubhayaṃ kaivalyam āpnoti(SK 68)

according to Potter[1977] p.9)の *Nyāyavārttika* と Śrīdhara(950-100 accord. to Potter[1977] p.10)の *Nāyakandalī* が注目を浴びているようである<sup>16</sup>。また、後期の作品として関連のあるものとしては Śrī Harirāma Tarkavāgiśa(1625 年頃)の *Muktivādivicārah* (*Calcutta Sanskrit College Research Series No.4*, 1959, p.62ff)がある。これらの書物が生解脱を認めているにもかかわらず、それに消極的ないし否定的態度を貫いているのは何であろう。Uddyotakara の *Nyāyavārttika* を中心に検討してみよう。

Uddyotakara は、主著 *Nyāyavārttika* に於いて *niḥśreyasa*(the summum bonum; 最高善、至福)を二種類に分けて、低いもの(*apara=drṣṭa*)と高いもの(*para=adrṣṭa*)とする。低い *niḥśreyasa* は真知(*tattva-jñāna*)の出現と同時に獲得されるが、高い *niḥśreyasa*(=「最後の解脱」(*apavarga*))は、真知に頼ることによって(leaning on true knowledge; cf. Oberhammer[1994] p.6)またはアトマンを始めとする 12 の認識対象(*prameya*)についての真実の認識(=真知)によって(cf. 赤松[1989] p.68)得られる。ところで、低い *niḥśreyasa* を得た人は、日常生活の中で経験される(*drṣṭa*)対象を「取ろう」か「捨てよう」か「無関心のままでいよう」かなどを選択することによって、身体を維持することができる。それが正に生解脱の状態である。ところが、その状態に於いては、身体を有していることになり、その限り「苦楽とともに経験する」という限界から離れることはできない。反面、高い *niḥśreyasa* に達した人は、苦の消滅(*duḥkhāpāya*)、「最後の解脱」(*apavarga*)を得る。要するに、身体の維持、苦楽の経験、低い *niḥśreyasa* と特徴づけられる生解脱は、Uddyotakara にとって究極の解脱ではなく、あくまでも *apavarga* より低い段階の解脱にすぎない。

## V 狭義の生解脱

以上、生解脱に対しての二つの見解を吟味してみた。一つは生解脱を真っ向から否定する見解であり、もう一つは先ずは肯定しているものの、真

<sup>16</sup> cf. Oberhammer[1994] p.35-45; Potter[1977] p.29-30; p.518.

の解脱として認めないことから終には否定したとも言える見解である。中でも、後者の見解、即ち「始動業と知者の身体の存続を認め、生解脱そのものは認めたが、それを真の解脱と認めない」とする、ニヤーヤ派、サーンキヤ・ヨーガ派の見解は、「狭義の生解脱」が如何なるものであるべきかを暗示してくれる。もしも以上紹介された両見解がともに生解脱を否定的に捉えているとするならば、生解脱(狭義の生解脱)は自ずと次のような定義されるであろう。

「生解脱とは、解脱を得ても知者の身体が崩壊せず当分の間生きていられる状態(=輪廻からの解脱が保証された状態)であり、しかも身体の維持によって起こり得る諸苦の経験から離れた状態(=諸苦からの解放が保証された状態)でもある。輪廻からの解脱と諸苦からの解放とが得られたという意味で、生解脱は生きながらの解脱であり、完全な解脱である」

上記の定義は特に不二一元論派において有効である。ところが、Śaṅkara の時からこういった定義が形作られていたとは言い切れないであろう。むしろ、不二一元論派の展開につれ議論を重ねる中で形成されていった、と見るのが順当であろう。

例えば Śaṅkara(700-750)は、或る個所では「知者が自らの身体に影響されない」<sup>17</sup>としながらも、他の個所では「知者が無明ないし潜勢力の影響を受けるのでそれに対処すべきである」<sup>18</sup>とし、相反する生解脱観を共有している。言い換えれば、彼は、生解脱者を「輪廻からの解脱」と「諸苦からの解脱」の両方をともに獲得した者としながら、他方「輪廻からの解脱」のみ獲得した者とするなど、態度が揺れている。それに対して Maṇḍanamiśra(670-720)は、一貫して「現象世界に影響されない生解脱者像」<sup>19</sup>を描いており、上記の定義に非常に近い。

<sup>17</sup> *BSBh* 1.1.4; 4.4.7; *GBh* 2.55

<sup>18</sup> *Bṛhādāraṇyaka-upa-bhāṣya* 1.4.7; 1.4.10; *GBh* 3.20; *BSBh* 3.3.32

<sup>19</sup> *Brahmasiddhi* p.131-133

ところで、上記の定義をまとめた形で言及したのは、Vidyāraṇya(1350年頃)によってである。彼は *jīvanmuktiviveka* p.10(Muṇḍaka-upa 2.1 のパラレル)に於いて、生解脱を次のように定義する。

「生きている人間には、活動や享受や苦楽などを特徴とする、心の属性が有り、それは煩悩を本質とするので、人間には束縛がある。その束縛の除去が生解脱である」

ここでは、生解脱が心の束縛から離れて始めて得られることになっている。もはや、生解脱は「輪廻からの解脱」だけでは得られない境地となっている。しかも Vidyāraṇya は、離身解脱を生解脱より下位の段階とする<sup>20</sup>。

一方、生解脱論が何故不二元論派を中心に議論され、同じく生解脱の概念を有したサーンキヤ派やニヤーヤ派など諸派によってはさほど議論されなかったのか。実際、生解脱論は、特に不二元論派の展開に於いて盛んに議論され、その意味を深めてきた。

その背景としては、不二元論派が「身体と多元世界とをそもそも虚妄なるものとして見なす」ことが挙げられるであろう。不二元論派の思想体系に於いて、明知を得た知者は、明知の獲得後に身体が存続するとしても、自らの身体と多元世界とを虚妄なるものとして見ることになるので、明知の出現(=[生]解脱の獲得)の時点で既に最高の境地に達したことになる。その反面、身体と多元世界の実在性を認める、ニヤーヤ・ヴァイシェシカなどの諸派に於いては、明知を得た知者は、明知の獲得後に身体が存続するとしても(=まずは生解脱の状態を認めるとしても)、自らの身体と多元世界とを実在するものとして見ることになるので(=それ故に身体と多元世界から与えられる諸苦から離れることが出来ないで)<sup>21</sup>、明知の出現(=輪廻からの解脱)の時点より、身体の崩壊(=諸苦からの解脱)の時点において

<sup>20</sup> cf. 沈奉燮[1994]

<sup>21</sup> そういった意味で、ニヤーヤ・ヴァイシェシカ派などは「輪廻からの解脱」より「諸苦からの解脱」を上位の解脱の条件としたと言える。cf. 仏教思想 8『解脱』「ニヤーヤ、ヴァイシェシカ両派の解脱観」宮元啓一, p.329-352.

上位の境地(=離身解脱(videhamukti)、独存(kaivalya)、最後の解脱(apavarga))に達することになる<sup>22</sup>。

ウパニシャッドに於いて共に認められたとされる「生解脱と離身解脱」とが、不二元論派によっては「生解脱」がより上位のものとして採択され、「離身解脱」はその下位のものとなった。反面、サーンキヤ派やニヤーヤ・ヴァイシェシカ派などによっては「離身解脱」が上位のものとして採択され、「生解脱」がその下位のものとなったと言えるであろう。そしてそれは彼らの世界観の相違によるものであろう。要するに、生解脱に対するこのような相違は「身体の崩壊後の解脱」(apavarga, kaivalya, videhamukti)を重んずるか、身体の維持時の解脱(jīvanmukti)を重んずるかの相違につながる。そして不二元論派は、自らの思想体系に合致する「生解脱至上論」の道を選んだのであろう。

#### VI 略号、使用テキスト及び参考文献

- Brahmasiddhi, Brahmasiddhi of Maṇḍanamīśra with Śaṅkhaṇḍī's commentary (Brahmasiddhivyākhyā)*, ed. by S.Kuppuswami Sastri, *Sri Garib Das Oriental Series No.16*, Sri Satguru pub. 1st pub. 1937 Madras, 2nd ed. 1984 Delhi.
- Jīvanmuktiviveka, the jīvanmuktiviveka or the Path to Liberation-in-this-life of Śrī Vidyāraṇya*, ed. with an English translation by Subrahmanya Śastri and T. R. Śrinivasa Ayyangar, Madras, the Theosophical Publishing House, 1935; 1978
- Sāṃkhyakārikā, Sāṃkhyakārikā with Sāṃkhyatattvakaumudī*, Vyasa Prakashan pub., second ed.1989, Varanasi.
- Samkṣepasāṅgī, Samkṣepasāṅgī of Sarvajñātmanamuni with Anvayārthaprakāśika*, Kashi Sanskrit Series 2, 2nd ed. 1992, Varanasi.
- Sarvadarśanasamgraha*, Sarvadarśanasamgraha of Sāyaṇa-mādhava ed. by Vasudev Shastri Abhyankar, *Government Oriental Series Class*

<sup>22</sup> cf. Oberhammer[1994] p.5.

- No.1, Bhandarkar Oriental Research Institute, third ed. 1978, Poona.
- Śrī-bhāṣya*, *Śrī-bhāṣya* of Rāmānuja with a commentary *Śrutaprakāśikākhyā* vol 1&2, ed. by Visishtadvaita Pracharini Sabha, 1st ed.1967, reprint 1989, Madras.
- Vedānta-Siddhānta-Muktāvalī* of Prakāśānanda with English translation and notes by Arthur Venis, *Gokuldas Sanskrit Series No.4*, 1975, Varanasi.
- BSBh *Brahmasūtraśāṅkarabhāṣya*  
 GBh *Gitābhāṣya of Śāṅkara*  
 SK *Sāṃkhyakārikā*  
 LYV *Laghuyogavāsiṣṭha*  
 PTS *Pāli Text Society*
- 赤松明彦 [1989] ウッディヨータカラの思想 — NV 研究(1)  
 -tattvajñānān niḥśreyasādhigamah-; インド思想史  
 研究 6, p.67-74
- 伊藤道哉 [1986] jīvanmukti 以後, 『印度学仏教学研究』 35-1, 424-421.
- 中村元 [1989] 『Śāṅkara の思想』, 東京, 岩波書店.
- 宮本啓一 [1982] ニヤーヤ, ヴァイシェーシカ両派の解脱観,  
 仏教思想 8, 京都, 平楽寺書店, 327-352.
- 沈奉燮 [1994] *jīvanmuktiviveka* における解脱論, インド哲学仏教学研究 2, 東京大学, インド哲学仏教学研究室, 100-118
- Kuppuswami Sastri  
 [1984] *Brahmasiddhi* of Maṇḍanamiśra with  
 Śāṅkhaṇī's Commentary, ed. by S. Kuppuswami Sastri,  
 Sri Garib Das Oriental Series No.16, Sri Satguru pub. 1st  
 pub. 1937 Madras, 2nd ed. 1984 Delhi.
- Nampoothiri [1990] *the concept of apavarga in Sāṃkhya Philosophy*,

- Nag Publishers.
- Oberhammer [1994] *La délivrance, des cette vie(jīvanmukti)*, Publications de  
 l'institut de civilisation Indienne 61, College de France, Paris.
- Karl H.Potter [1977] *Indian metaphysics and epistemology*, Princeton Univ.  
 Press, Princeton
- Ramachandra Rao  
 [1979] *jīvanmukti in Advaita*, IBH Prakashana, Bangalore.
- Sprockhoff [1962] die Vorbereitung der Vorstellung von der Erlösung bei  
 Lebzeiten in den Upaniṣads, *WZKSÖ* 6, 151-178.
- Srivastava [1990] *Advaitic concept of jīvanmukti*, Bharatiya Vidyā  
 Prakashan, Delhi.
- Vetter [1979] *Studien zur Lehre und Entwicklung Śāṅkaras*, Wien.

シム ボング ソブ  
 <東京大学大学院博士課程修了>

# <キーワード>

生解脱, 離身解脱, 解脱, 始動業, 不二一元論派.